E 4　家政学の対象としての個の問題
一独居老人創出過程の1事例研究を通して一

東筑紫短大　花崎正子

目的　家政学は，これまで一般には，家庭生活を対象とし，その向上を目的とすると考えられてきた。しかし，対象としての家庭生活は，ややもすると家庭生活そのものの様相に視点がおかれ，個としての家族ひとりびとりの生き方にまで問題性が拡大されていないのではないか。しかし，今日における家政学が人間生活を中心課題に据えれば，そのひとりびとりの生き方を視野のかなめとし，家庭が個の人間性を最大限に発揮すべく，家族員相互のあり方，人間と物との関係を考えていくことが重要となるのではないか。このような問題意識のもとに，次のような調査を実施し，家庭生活における個の位置を実証的に明らかにしようと試みた。

方法　実証的方法として，島根県邇摩郡仁摩町大字馬路町の独居老人5人を対象とし，インタビューによる調査を実施した。インタビュー調査に先立ち，馬路診療所医師中野夫妻に予備調査を依頼し，サンプルの選定を行った。対象を独居老人としたのは，ファミリーサイクルにおいて家族消滅前の最後の到達点であり，個の問題が顕著にあらわれ，しかもポンネにせまれるのではないかと考えたからである。調査時期は57年5月であった。

結果　独居生活を可能とする経済的要因，および日常生活における人間関係の要因あるいは自己表現の場が獲得・具備されれば，「精神的自由」を求めて独居生活は創出されていくものと思われる。以上のように，家政学が家庭生活の向上を意図する場合，その生活主体としての人間，とくに個の存在の認識を通してのアプローチが重要となるのではなかろうか。